

## 日本ロレンス協会第42回大会プログラム

日時：2011年6月25日（土）、26日（日）

会場：神戸大学鶴甲第1（国際文化学研究所）キャンパス内  
国際コミュニケーションセンター棟D312

住所：〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1-2-1

連絡先：神戸大学 石川慎一郎研究室 Tel 078-803-7691 iskwhin@gmail.com

交通アクセス：

阪急六甲駅・JR六甲道駅・阪神御影駅より神戸市バス16系統「六甲ケーブル下」行に乘車し、「神大国際文化学部前」下車（バス所要時間：六甲駅より約6分、六甲道駅より12分、御影駅より18分）。キャンパス内経路については、<http://language.sakura.ne.jp/s/daccess.html> 参照（学会ウェブサイトからもリンクされています）。なお、神戸大学のキャンパスは一带に広く点在しておりますので、最寄駅からタクシーで来られる場合は、必ず、行先を「国際文化学部」とご指示ください（阪急六甲駅・JR六甲道駅からおよそ1~2メートルです）。神戸大学正門は、国際文化学部とは別キャンパスになりますのでご注意ください。

昼食 [25日(土)] のご案内：

会期中は生協食堂が休業しており、徒歩圏内には食事を購入できる場所がございません。お手数をおかけしますが、事前に弁当を予約（¥1,000）なさるか、各自で昼食をご持参ください。注文済みの弁当のキャンセルはご遠慮願います。なお、自動販売機は会場付近にございますので飲料のご持参はご不要です。

役員会：

日時：6月24日（金） 午後6:30~8:30（開場6:00）

場所：三宮ターミナルホテル会議室（JR三ノ宮駅構内 TEL: 078-291-0001）

食事：ホテルの弁当 ¥2,100（当日お支払いください）

※近年インターネットによる予約の方が団体予約より割安になる場合が多い為、今年から協会を通じた役員用宿泊予約は中止させていただきます。役員の方は、お手数ですが、10頁の近辺ホテルリストをご参照いただき、各自でホテルをご予約いただくよう、お願い申し上げます。尚、三ノ宮駅・元町駅周辺には多数のホテルがあり、JRまたは阪急電鉄利用で、三宮駅から大学最寄り駅（JR六甲道/阪急六甲駅）までは7分程度、元町駅からは10分程度です。

第1日目：6月25日（土曜日） 受付：午前10時00分より

総合司会：石川 慎一郎（神戸大学准教授）

◎開会の辞：会長 武藤 浩史（慶應義塾大学教授）（10:30）

◎研究発表 1 10:40-11:15

『カンガルー』におけるサマーズの誤読への抵抗

司会 新井 英永（大阪府立大学准教授）

板谷 洋一郎（中央大学兼任講師）

◎研究発表 2 11:15-11:50

*The Plumed Serpent* の主人公ケイトの二面性に対するロレンスの父権的意志：

女性の近代的自我と個

司会 山田 晶子（愛知大学教授）

稲見 博明（女子美術大学教授）

\*小休憩 11:50-11:55

◎研究発表 3 11:55-12:30

『アポカリプス論』最終ページの記述:「私は太陽の一部であり、大地の一部であり、海の一部である」に関する一考察

司会 北崎 契縁(相愛大学教授)

田形 みどり (東海大学准教授)

\*昼食: 12:30-14:00 (上記「昼食のご案内」を参照のこと)

◎開催校挨拶:神戸大学 国際コミュニケーションセンター長/国際文化学研究所副研究科長  
島津 厚久(神戸大学教授)(14:00)

◎シンポジウム:『トマス・ハーディ研究』再読のために——リベラリズム、帝国、「教養小説」の転回  
14:10-17:10

司会 木下 誠 (成城大学准教授)

伝染する「病」——『日蔭者ジュード』から『息子と恋人』へ

角谷 由美子 (神戸女学院大学大学院研究生)

近代イギリス小説と土地問題——ハーディ、フォースター、ロレンスにおける(agri)cultureの変質

田中 裕介 (中央大学兼任講師)

『トマス・ハーディ研究』と金融資本——スパイ小説/“Sex Novels”/「教養小説」

大田 信良 (東京学芸大学教授)

◎総会 17:20-18:00

◎懇親会 18:15-20:15 ごろ

場所:神戸大学国際文化学部学生ホール 会費:¥5,000 (大会当日受付でお支払いください)

第2日目:6月26日(日曜日)

◎若手シンポジウム:ロレンスのテキストの可能性 9:30-12:30

司会・講師 近藤 康裕 (東洋大学講師)

クリストファー・コードウェルからロレンスへ

近藤 康裕 (東洋大学講師)

マギーからイヴェットへ——ロレンスが読むショーペンハウアーとG・エリオット

藤原 知予 (香川高等専門学校助教)

「(有) からロゴスが生まれる」——ロレンスの思想を現象学的見地から再考する

鳥飼 真人 (和歌山大学非常勤講師)

ロレンスを読むウィリアムズを読む——個人、社会、ネイション

大貫 隆史 (関西学院大学准教授)

◎閉会の辞:副会長 新井 英永(大阪府立大学准教授)

## 研究発表

### 『カンガルー』におけるサマーズの誤読への抵抗

板谷 洋一郎 (中央大学兼任講師)

『カンガルー』は、第一次世界大戦後の荒廃したイギリスを去り、“exile”としてオーストラリアに来たサマーズが内省を通じて自己の再構築を模索する物語である。小説で、サマーズは自分に対する複数の「誤読」に直面し、内省を通じてそれらを吟味することによって、真の自己を希求していく。他者の彼に対する「読み」は、ハリエットのものを除けば、彼らが一方的に、都合のよいイメージを彼に投影したもので、アマーティア・センの言う個人の多元的アイデンティティを自由に選び、有する権利を脅かすものである。

他者がサマーズに押しつける像は、彼が応えることのできない「読み」である。こうした誤読からの離脱によってサマーズは内省をさらに深め、文化・社会・政治的に構築されるアイデンティティからの自由を求め、自己に内在する「孤立」の象徴“dark god”に呼びかけをしていく。

契機となるのは、他者性のシンボルである“bush”や“sea”との対話で、そこで彼は文明に抗う「知覚しえぬ」存在を感じ、感情や記憶に支配される自己からの解放の可能性を情景の中に(代替的な形で)見る。

本発表では、他者の誤読に対峙し、自己の奥深くに“calling”することにより、サマーズが自らを「対象化」し、瓦解を続ける西欧的価値観からの脱却を図り、さらなる流浪に向かう点に注目したい。

### *The Plumed Serpent*の主人公ケイトの二面性に対するロレンスの父権的意志： 女性の近代的自我と個

稲見 博明 (女子美術大学教授)

本作品は作者ロレンスが、いわゆるリーダーシップ小説の中では、もっとも心血を注いだ野心的な作品であり、作者にとっては一時、もっとも重要な作品ととられていた。筆者は、先に『カンガルー』を論じて、そこに、脱近代(トランス・モダン)の独創的な志向を読み取り、それが本作品にどのように受け継がれているのか、確認する作業を行ったが、多くの評者が指摘するように、主人公ケイトの造形の二面性の矛盾のために説得力がなく、脱近代の志向が前近代(プレ・モダン)に転じたことを論じた。

問題はロレンスの意識の中の父権的意志が、ケイトの個の脱近代的造形を阻害した点にあると考えたのである。しかしながら、ロレンスは本作品と平行して、女性が主人公となる中編小説(『聖モア』と『プリンセス』)や短編小説(『馬で去った女』)の三作品を書いているのであり、女性へのロレンスへの共感強いものがあり、これを作業仮説として、ロレンスの母権的志向性とするならば、ケイトの造形の矛盾とはロレンスの父権的意志と母権的志向性との矛盾が衝突した結果生じたと考えられるのである。この矛盾の意味するものを、ロレンス自身の哲学と対比して本発表で考察したい。

### 『アポカリプス論』最終ページの記述：

「私は太陽の一部であり、大地の一部であり、海の一部である」に関する一考察

田形 みどり (東海大学准教授)

人格と精神性を重視するキリスト教文化社会に生まれ育ったD.H.ロレンスは、青年期に至り、自己の肉体がその精神性の重圧のもとで小さく縮こまり、恐怖に震えていることに気付いた。D.H.ロレンス文学はここから始まり、その文筆活動は、終生、肉体の復権を求め模索し続けたのであった。

肉体の基盤をなす、性の復権に関するD.H.ロレンスの記述は、今日まで様々に考察されてきた。しかし、D.H.ロレンスが求めた肉体の復権は、性の復権のみにとどまらなかったはずである。死を迎え

る3か月前に書き残した『アポカリプス論』の最後において、「我々は、我々が肉体存在として生きており、この生き生きとした具象のコスモスの一部であるという歓喜を祝し踊るべきである。私の眼が私の体の一部であるように私は太陽の一部であり、私が大地の一部であることは私の足が良く知っている。そして私の血は海の一部である。」と述べている。人間も他の生命体と同様に地球を母体として生まれ出ている生命体であり、その肉体は自然回流の真只中にあるというこの事こそが、D.H.ロレンスが最終的に辿り着いた肉体の復権であったのではなかろうか。本論では、「人間が太陽や地球の一部であり、胴体は大地と同じ断片であり、血は海水と交流する」という事が、D.H.ロレンスにとって具体的にどのようなことであったかを、そのほんの一部ではあるが、老子・荘子における道家思想と対照させながら、考察してみたい。

\*\*\*\*\*

## シンポジウム

### 『トマス・ハーディ研究』再読のために——リベラリズム、帝国、「教養小説」の転回

司会 木下 誠 (成城大学准教授)

このシンポジウムは、『トマス・ハーディ研究』を再読するために、なかでも『日陰者ジュード』解釈を再検討するために、ヴィクトリア朝中期の小説から世紀末の『日陰者ジュード』(1895)さらには『息子と恋人』(1913)へと至る「教養小説」の転回、そして同時期の英国リベラリズムと帝国の文化の連続性/断絶を明らかにする。『トマス・ハーディ研究』というテキストの可能性は、モダニズム小説としての『虹』(1915)の「新しさ」よりもむしろ、その「新しさ」へと引き渡されずに『息子と恋人』に残存した要素に注目するときに見えてくるのではないだろうか。3人の講師は、身体、ジェンダー、土地財産の継承、「自由」と「教養」をめぐる議論、グローバルな金融資本、国際政治関係などを取り上げながら、ロレンスの「哲学的」エッセイと小説をジャンル横断的かつ歴史的な観点から再解釈する。

『トマス・ハーディ研究』再読のためのサブテキストとしては、以下の論文・研究書をシンポジウムでおもに参照する予定である。

Elaine Showalter, "Syphilis, Sexuality, and the Fiction of the Fin de Siècle." Ed. Ruth Bernard Yeazell. *Sex, Politics, and Science in the Nineteenth Century Novel*. Baltimore: John Hopkins UP, 1986. 88-115. (Lyn Pykett, ed. *Reading Fin de Siècle Fictions*. London: Longman, 1996. 166-83 に再録)

David Trotter, *The English Novel in History 1895-1920*. London: Routledge, 1993.

特に "Degeneration" "Declension" "Awakenings" "Sex Novels" などの章。

Hilary Simpson, *D. H. Lawrence and Feminism*. London: Croom Helm, 1982.

協会外からは、田中裕介氏を講師としてお招きする。田中氏は、カーライル、アーノルド、ペイター、ワイルドなどの19世紀散文研究を専門としている。そのアプローチとしては、新歴史主義以降のヴィクトリア朝研究の流れを受けて、それらを社会史、政治史、文化史との関わりにおいて読み直す作業を進めている。田中氏の発表を通して、19世紀散文の伝統を踏まえた『トマス・ハーディ研究』の読みもさらに深まることと期待される。

(なお、今回のシンポジウム全体のテーマと関連した田中氏の論文を、以下のサイトで読むことができます。ぜひご参照下さい。Yusuke TANAKA, "The Premature Burial of Liberalism: Inadequate Fetishists in Oscar Wilde's *The Picture of Dorian Gray*"

<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/18336/2/jinbun0000402430.pdf> )

## 伝染する「病」——『日蔭者ジュード』から『息子と恋人』へ

講師 角谷 由美子 (神戸女学院大学大学院研究生)

2006年12月、書評誌 *The Times Literary Supplement* に19世紀英国の文豪 Thomas Hardy に関するある驚くべき記事が掲載された。それは元開業医である Robert Alan Frizzell 博士によるもので、これまで胆石および心不全で1912年に亡くなったとされていたハーディの一人目の妻 Emma Lavinia Hardy の死因が実は梅毒であり、ハーディから感染したものと考えられるというのである。この発表に対するハーディの専門家たちの反応は賛否両論であるが、フリゼル博士はハーディの伝記や詩に描かれるエマの病状は胆石によるものではなく、末期の梅毒患者の症状であると主張している。

エマの死後およそ100年たった今、その信憑性を確かめることは極めて困難であるが、この研究はハーディ作品のより深い理解と新たな解釈を可能にすると同時に、あらためて「梅毒」という性病がいかに19世紀のヨーロッパ社会に広範囲に蔓延し人々を震撼させた一つの大きな社会問題であったかということを再認識させてくれる。

当然のことながら、世紀末ヨーロッパ文学にも「梅毒」を取り扱う作品が数多く登場してきたわけであるが、国や男女によって梅毒に対する先入観や、諸悪の根源とする対象がそれぞれ異なっていた。そこで、今回のシンポジウムにおいてロレンスのハーディ論を再考するにあたり、ハーディの *Jude the Obscure*、ロレンスの *Sons and Lovers* を取り上げ、梅毒に代表される性病、または総括的な「病」のイメージが、優生学や遺伝、または進化や退化といった当時の言説に触れ、いかに継続、変容していったのか探っていききたい。

## 近代イギリス小説と土地問題——ハーディ、フォースター、ロレンスにおける(agri)cultureの変質

講師 田中 裕介 (中央大学兼任講師)

19世紀に形式の完成をみたといわれるイギリスにおける「小説」は、そのプロットとして土地財産の継承をほとんど不可欠の要素としている。ディケンズ『荒涼館』(1852-53)、ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』(1871-72)といった展開が錯綜をきわめるヴィクトリア朝中期の小説であっても、その背後には変転する土地財産の継承という一貫した筋が見え隠れする。一方ヴィクトリア朝後期からエドワード朝にかけてのイギリス小説は概して、スコット、オースティンからディケンズ、ジョージ・エリオットまでに見られるような「正統的な」小説の形式を欠いているように思われるが、その要因を、イギリスの「伝統」の背骨をなしていた<大土地所有家族の長子相続>という制度が不安定化したという歴史的事実に求めてみたい。「継承」というテーマを受け継いでいるかに見えるフォースター『ハワーズ・エンド』(1910)において、「継承」はもはや小説の自明な下支えではなく、パロディに近いのである。

この財産継承制度の溶解を決定づけたのは、大土地所有貴族への重点的課税を財政方針のひとつとして掲げた1900年代の自由党政府による一連の政治改革であった。そしてその改革の駆動力となったのは、政策論議である以上に、ある思想、つまり世紀転換期に活発化した自由貿易論争のなかでイギリス国民の本質として理念化された「自由」であったといえよう。この「自由」の尖鋭化の過程がすでにヴィクトリア朝中期から後期にかけての政党政治のなかで加速していたのと並行して、土地財産の流動化も19世紀最後の数十年の間に大きく進んでいたと見ることができる。19世紀後半、上流階級のあいだで土地資産を流動資産に換える流れが強まるなかで、「農業」の危機が叫ばれ、いわゆるジェントルマンは大所有地という物的財産ではなく「教養」と結びついた生活スタイルにその存立の根拠を見出すようになっていた。世紀末において急激に理念化され変質した「自由」と「教養」を、イギリス小説はどのように映し出したのか。その文学の試みは自ずとヴィクトリア朝小説の形式を

機械的に踏襲する境域にはとどまりえなかった。ハーディ『日陰者ジュード』(1895)、ロレンス『息子と恋人』(1913)を中心に、広義の世紀転換期の小説を検討することによって、数十年にわたるイギリス社会の構造的変動を、文学テキストを通じて考察するためのヒントを提供したい。

### 『トマス・ハーディ研究』と金融資本——スパイ小説／“Sex Novels”／「教養小説」

講師 大田 信良 (東京学芸大学教授)

ハーディのテキストにおける「梅毒」の表象・優生学や退化の言説、あるいは、エドワード朝にいたるイギリス小説がさまざまなかたちで提示する「継承」のテーマは、19世紀末から1910年代にかけてのリベラリズムの変容(チェンバレンの社会帝国主義をアスキスの自由帝国主義・ロイド＝ジョージの自由党改革主義が取り込んだ、いわゆる、ニューリベラリズム)と、密接な関係があるのではないか。本発表では、その変容するリベラリズムと同時代の、英国帝国主義の外交・軍事政策や戦略上の変化を主題化することを試みる。

そのために、世紀末に流行した帝国主義的冒険小説(Trotter “Frontiers”142-53)が、1910年前後に——より正確には、1907年の三国協定の成立前後——、スパイ小説(“Spies”167-80)に、ジャンルの変容を遂げたことを、まずは、確認する。この政治的“Awakening”(Trotter 181-93)と連動していたのが、もちろん、Social Purity から Social Hygiene へ、そして、人種の退化から再生へそのポイントが移行する優生学だったのであり、そうした1910年代の優生学を具現するかにみえる“Sex Novels”(Trotter 197-213)には、性的＝政治的“Awakening”が表象されていることを見逃してはいけまいだろう。と同時に、同時期のHardy、Maugham、Joyceの「教養小説」に目を転じてみるならば、これらのテキストは、Robert Hichens, *Felix*(1902)やElinor Glyn, *Three Weeks*(1907)などの“Sex Novels”とは、「批判的距離(critical distance)」を取ろうとしている、らしい。TrotterによればLawrenceの*The Trespasser*も“Sex Novels”だが、Edward Garnettとの出版企画のやり取りをした手紙を取り上げて指摘しているように、*Sons and Lovers*は「教養小説」として生産されたようであり、ポピュラー・カルチャーやロマンス＝“Sex Novels”と、単純に、同じではない。

こうしたテキスト解釈の手続きを経たうえで、「英文学」の「偉大な伝統」に属するロレンスがものした『トマス・ハーディ研究』とグローバルな金融資本との関係を、みんなで探ること、これが本発表の最終的な目論見である。ロレンスが具現する英国リベラリズムは、一見覇権を失い衰退したり死を迎えたかにみえる英国帝国主義やその金融資本と、いったいどのような関係を結んでいたのか?精神と肉体、男性と女性、性と死、拡張と収縮、獅子と一角獣の二項対立からなる二元論、および、それと一応区別され独立しただが奇妙なかたちで共存しているようにみえる、第三項すなわち聖霊の調停を、(ニューリベラリズムや優生学の言説あるいはスパイ小説・“Sex Novels”・「教養小説」とも交錯する)帝国としての英国の文化あるいはその地政学によって、歴史化する、ということになるだろうか。

## 若手シンポジウム

### ロレンスのテキストの可能性

司会 近藤 康裕（東洋大学講師）

D・H・ロレンスというひとりの作家をめぐるシンポジウムをおこなう意義は何か——これはけっして大袈裟な問いではなく、これまでに歴大な先行研究を有するロレンスの作品を読み、それについて論じるとき、そこに何かしら意味のある議論を付け加えようとするならば、避けて通れない問いである。わたしたちがこの問いにたいして出さる答えは、ロレンスのテキストの可能性を探ることにその意義はある、というものだ。この可能性を探る作業においては、かならずしもロレンスのテキストだけが中心に来るわけではない。また、いわゆるロレンスの「文学」作品（＝小説・詩）だけが議論されるのではない。多岐にわたるロレンスの著作が、小説や詩という狭義の「文学」の範疇を軽々と越境するものであると同様に、その生成にかかわったテキストと、ロレンスの仕事のがちの世代にひらいたテクスチュアルな可能性とに限りはない。こうした関係性とテキストの無限のひろがりのなかで、ロレンスに先立つ時代のテキストがいかにもその作品に影響を与え、作家は何をそこに付け加えて独自のテキストを創り出したのか、また、ロレンスのテキストを読む同時代や後代の作家・批評家は、どのようにロレンスを読み、時代の変化への反応としてのみずからのテキストの生成に、ロレンス読解を関連づけていったのか、そしてそれを読むわたしたちは、そのテキストの歴史＝歴史というテキストに何を読み取ることができるのか、こうした点を、ひろく19世紀から20世紀後半にいたるテキストとロレンスのそれとを結びつけながら、4名それぞれが論じてゆく。

### クリストファー・コードウェルからロレンスへ

講師 近藤 康裕（東洋大学講師）

社会主義が、そのもっともひろい意味において、きわめておおきな影響力をもった時代と、ロレンスのテキストが生成され、それがつよい関心をもって受容されて思想の形成に重要な役割をはたした時代とは重なりあう。ロレンス自身、社会主義に影響を受け、後代の社会主義の思想に影響を与えてきたが、この重なりあいとつながりを条件づけているのが近代である。この近代という問題をブルジョア・カルチャーとして論じ、ブルジョア・カルチャーと来たるべき社会主義の文化との臨界点にロレンスを位置づけて評価したのが、20世紀のイギリスでもっとも重要な社会主義批評家のひとりに数えられるクリストファー・コードウェルであった。1930年代に作をなし、スペイン市民戦争で夭折したコードウェルは、50～60年代までひじょうによく読まれたが、近年ではあまり論じられていない。コードウェルが論じるブルジョア・カルチャーの問題は、疎外論から個と社会をめぐる問題まで、近代に対峙して思想を紡いできた、ニューレフトにその典型をみることのできる社会主義の系譜が取り組み続けてきた問題にほかならない。本発表では、コードウェルのロレンス論を中心に、ロレンスとコードウェルを文化と社会をめぐる系譜において論じたレイモンド・ウィリアムズのテキストなども参照しながら、近代という問題を浮かび上がらせるこの系譜とロレンスのテキストの可能性を示したい。

### マギーからイヴェットへ——ロレンスが読むショーペンハウアーとG・エリオット

講師 藤原 知予（香川高等専門学校助教）

若きロレンスはG・エリオットの『フロス河の水車小屋』を愛読し、第一作目の小説『白孔雀』執筆時手本とした。『フロス河の水車小屋』のマギーが『白孔雀』のレティのモデルとなっていることは、

ロレンス自身書簡で述べているが、『白孔雀』以降の前期作品のヒロイン達にも、マギーの影響が少なからず見られる。

ロレンスのマギー解釈を考察する上で重要なのは、『フロス河の水車小屋』の読みを深めていた1908年と同年にロレンスが熱中して読んだ、ショーペンハウアーの「愛の形而上学」における本能論である。ショーペンハウアー哲学を用いてロレンスが解釈したマギーのヒロイン像、そしてマギーをモデルとして生まれたロレンスのヒロインたちが、前期の作品の中でどのように描かれ、変容していくかを辿る研究の一環として、本論では中篇「処女とジプシー」のイヴェットを取り上げて考察する。

マギーとイヴェットの共通点は、自分たちの階級に属さないジプシーと交流を図ろうとすること、そして小説の最後に洪水に合うことである。しかし本能的欲望を抑圧し諦め、洪水で命を落とすマギーと違って、イヴェットはジプシーに助けられて洪水の中生き延び、ジプシーに抱いていた本能的憧憬の念を成就させる。ロレンスがイヴェットを、マギーに叶わなかった欲望を成就したヒロインとして描こうとしたという仮説を立て、ショーペンハウアーの本能論をもとに考察する。

### 「(有) からロゴスが生まれる」——ロレンスの思想を現象学的見地から再考する

講師 鳥飼 真人 (和歌山大学非常勤講師)

ロレンスのテキストを再検討することによって彼の「思想」に対する新たな解釈を求めようと試みる際、我々はその思想が「哲学、いふなれば形而上学に完全に依拠する」という考えを決して無視してはならない。ロレンスの思想は、彼の文筆活動における円熟期というよりも、むしろその形成期＝初期において最も明確に現れ出ていると考えられる。その時期のロレンスにとって思想の形成とは、彼による「存在への問い」の始まりと言い換えても同じことである。様々な近代思想に影響を受けそれらと決別した後、ロレンスが本格的に開始する「存在への問い」は、まさに現代思想の先駆ともいふべき様相を呈している。興味深いことにその問いは、ハイデガーによる現象学的存在論またはそれに基づく「存在への問い」と密接に関わりあう可能性を含んでいる。このように考えることで我々は、ロレンスの思想の現代性だけでなく、彼が文筆活動の初期において既に、旧来の西洋における哲学体系、さらにはそれと不可分である伝統的宗教観を転覆させる力を自らのテキストを通じて開示しようとしていたことを明らかにすることができる。本発表では以上の考えを、多くの批評家が彼の最初の哲学的作品と評している『息子と恋人』への序文を再度深く読み直すことによって示したい。

### ロレンスを読むウィリアムズを読む——個人、社会、ネイション

講師 大貫 隆史 (関西学院大学准教授)

本報告は、Raymond Williams, *Modern Tragedy* (1966) におけるロレンス論を主たる考察対象とする。*Women in Love* を読むウィリアムズは、この小説が基本的に、個人と社会の問題を、正確には個人と社会の「最終的な分離」の問題を扱ったものとみなしている。こうした読解は、社会とネイションをほぼ同一のものと見なす議論（例えば、近年のイングリッシュネスをめぐるそれ）のもとでは、そのアクチュアリティに疑問符が付けられてしまうかもしれない。しかし今回は、ここでのウィリアムズの同時代的な「仮想敵」をあぶり出すことで、彼の言う「社会」そして「個人」とはどのようなものなのか考えていきたい。

## キャンパスマップ



※会場は上記の 64 番の建物です。キャンパスは斜面に位置していますので、キャンパスに入られたら、一番北側（山側）の突当りまでお進みください。会場の 312 教室は、建物の 1 階にあります。

## 大会会場周辺ホテル情報

神戸大学の付近にはホテルはございませんので、JR・阪急三宮駅、あるいはJR元町駅付近のホテルが便利です。JRまたは阪急電鉄利用で、三宮から大学最寄り駅（JR六甲道／阪急六甲駅）までは7分程度、元町からは10分程度です。

多くのホテルがありますが、一例を下記に示します。価格（シングル1泊）は「楽天トラベル」調べですが、曜日・シーズンで異なりますので、詳細は各自でご確認ください。

東横イン神戸三ノ宮2（三ノ宮駅2分）5980円  
〒651-0096 兵庫県神戸市中央区雲井通5-2-2 TEL: 078-232-1045

R&Bホテル神戸元町（元町駅3分）6300円  
〒650-0021 兵庫県神戸市中央区三宮町3-3-1 TEL: 078-334-6767

ダイワロイネットホテル神戸三宮（三ノ宮駅5分）8000円  
〒651-0087 兵庫県神戸市中央区御幸通5-1-6 TEL: 078-331-8181

アパホテル<神戸三宮>（三ノ宮駅3分）8000円  
〒651-0087 兵庫県神戸市中央区御幸通5-2-14 TEL: 078-272-2111

ホテルオークラ神戸（元町駅10分）9500円  
〒650-8560 兵庫県神戸市中央区波止場町2-1 メリケンパーク内 TEL: 078-333-0111

三宮ターミナルホテル（三ノ宮駅0分）9500円  
〒651-0096 兵庫県神戸市中央区雲井通8-1-2 TEL: 078-291-0001

-----memo-----